

# 長崎高教組新聞

発行  
長崎県高等学校教職員組合  
〒850-0013 長崎市中央2丁目2番5号  
長崎高教組会館  
☎ (095)-827-5882  
Fax (095)-826-2976  
編集責任者 佐藤真一郎  
購読料 一部10円  
組合員は組合費を含む  
メールアドレス  
naga-kks@fsinet.or.jp



## 2022第一回賃金確定交渉 働き方改革に繋がる大きな方針

高教組は10月25日、22年度賃金確定交渉の第一回目の交渉を行いました。交渉には、高教組から鍛冶委員長、他執行部5人が参加し、県教委は、中崎教育長、他8人が対応しました。

### 労使間の誠意

高教組は県教委との交渉において「労使間の誠意ある対応」を要求し、それを基に交渉を行っています。

速報第6号で既報の通り、10月14日に2022年に始まった試行中の人事評価制度(賃金リンク)について、教職員にまだ最終評価も示されていない段階で、検証も行わずに、新しい提案をするのは、

### 教育長「いつか休むべき」

教育長は特別支援も



思署礼長  
のた一育  
員って教  
職まし崎  
教対中  
上:がに  
いなる  
名す



重点要求署名を手交する様子

高教組は「管理職による指導のおかげで、職員の退校時間が早くなっているが、その分持ち帰り業務の量が増えている」と指摘しました。これに対し、教育長は「先生の仕事で、子供と向き合う時に、密の



鍛冶執行委員長が発言している様子

含め、3分の2の県立校の視察を行っています。視察を終えて教職員の働き方に関する感想を尋ねました。教育長は教職員の力を発揮するという観点で「女性の登用。いろんな団体との協働・連携・民間へのアウトソーシングで業務見直しをできないか考えている」さらに、長期休みの過ごし方について「承認研修があるが、実効性が発揮されていない。教育委員会としても教職員の働き方改革に繋がる大きな方針を出したい」と回答しました。

高教組は「管理職による指導のおかげで、職員の退校時間が早くなっているが、その分持ち帰り業務の量が増えている」と指摘しました。これに対し、教育長は「先生の仕事で、子供と向き合う時に、密の

## 集いあい促進費で「もっと大きな輪に」 鹿工教職員ソフトボールリーグ戦参加

今回は、全教共済集いあい促進費を使用させていたいただきありがとうございました。



集いあい促進費で購入した道具

決まり、バットにボール、ボールケース。春とは違う道具にチームメイトは驚きました。「どがんと」と、問われ「組合に相談して助成してもらった」と即答したところ、「今から組合に入ろうかな」など会話も弾みました。「組合」という言葉に一步引かれるかと思いましたが、紹介でしたが、組合に対して否定的な方はいないようにも感じました。当然、多くの署名も積



試合前のオーダー発表

逆転で勝利することが出来ました。予選最終戦で勝利し、優勝決定トーナメントへ進出。鹿工がもっと大きな輪になれるよう、できる分野で、できる範囲の活動を進めていきたいと思えます。

小規模校ではありませんが、全教共済の総合共済も多くの方に加入いただいています。全教共済集いあい促進費をいただくことができ感謝いたします。ありがとうございました。

コロナ感染予防のために休止していた鹿町リーグスローピッチソフトボール大会が今年度より再開され、地域に根差す開かれた学校として当然のごとく参加をいたしました。いざ参加を決めた春季大会ではボールとバット、グローブは授業物品を借用しての参加でした。これではいかんと思

長崎高教組へ相談したところ、集いあい促進費を教えてくださいました。申請に至りました。組合員が少ない中申請するにも心苦しかったのですが頼りました。

秋の大会への参加も

道具が充実した秋の大会初戦は、仲間のセッションも上がり、シーソーゲームをサヨナラ

きだという提言を、高教組は期待している」と伝えました。

教育長は、県内の子ども数について「中学3年が現在1万2千人。去年生まれた赤ちゃんの数が8千人。だから、これが15年後の高校生で、この15年で2から3割子供が減る」とし、「せつかく県立高校にはいい先生がいて、いい学びをやっているが、それが全く、県民の子供達・保護者から支持されていない」と危機感を示しました(裏面へ)

### 高齢層教職員の処遇改善

高教組は、定年延長後に7割で働く人もいれば、管理職経験者はプラス4万円、再任用6割5分という給与差がある中で、同じ業務を行う。その不均衡是正を要望しています。これに対し、初村人事管

理監は「年度末に次年度の校務分掌・学級担任の希望調査を毎年取り、それを受けて、希望通りになる、ならぬい、を含めて面談を行い、それぞれの先生方が、納得いく形で新年度を迎える。体力的に

担任ができない人もいれば、一方で子どもに向き合うのが好きだから、担任をしたいという教職員もいます。一人一人の希望に極力配慮し、叶える形で管理職も役割分担を決めている。そういうところ

高教組は「学校現場における負の連鎖を止めるために、お金は最初から出ないという前提で進められると、それ以上話ができない。教育行政のトップが政策にどう反映するのか、知事と話して、こういったところに金を使うべ



県教委側：左から初村人事管理監、中崎教育長

で納得できないような状況を作らないように工夫しながらやっているところと」と回答しました。高教組は「それは理想だ。現実的に60歳以上が増えれば、なかなかそうはならない。みんな同じ仕事をしています。中

「なんで賃金が減って同じ仕事をするのか」という疑問の声が大き」と批判しました。これに対し教育長は「大変申し訳ない。数を増やす、給料を上げるのは現実的ではない」と回答しました。

高教組は「学校現場から3割子供が減る」とし、「せつかく県立高校にはいい先生がいて、いい学びをやっているが、それが全く、県民の子供達・保護者から支持されていない」と危機感を示しました(裏面へ)



# 「被災地を見る・歩く・考える」行動(全教)② 福島を現地で知る



車内でも放射線測定器の針は振り切れた。11月24日 大熊町にて



幹線道路以外は未だ多くが通行止めとなつてゐる。11大熊町



帰還困難地域では、家は傾き雑草が茂る。人影はない。11双葉町



除染土の仮置き場。県外の最終処分場へ移す約束だが、受入先は未定。11大熊町

全教(全日本教職員組合)は、労働組合として、国民が安心・安全

実際に使用された放射線防護服。高さ2m近くで威圧感がある。防護というが完全ではなく、被曝のレベルを和らげるという程度。11大熊町・伝言館に展示



(表面から)教育長は交渉の中で幾度も「現場の声を聞きたい」と繰り返しています。県立校の視察をしても、現場の管理職のフィードバックを通じた意見などで、対等な立場にある長崎高教組の意見は貴重な意見として捉えて

## 教育長「現場の声を聞きたい」

認識しながら、歯止めをかけず、学校現場の教職員も他県の大学進

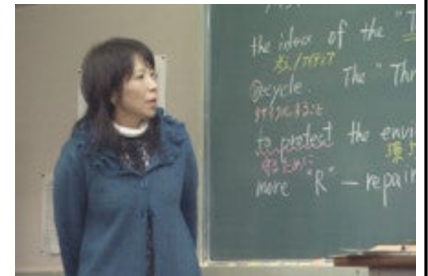
いるようです。数十年にわたる県外への流出人口について、問題への人口流失に加担し

## 復興は遠く

に暮らせる社会の実現をめざし、9月23、24日に、福島県原発事故被災地へのフィールドワークを行いました。全国から多くの組合員が参加し、長崎からは岡山執行委員が参加しました。前号に続き、メディアがあまり伝えない現地の状況を報告します。今回は、事故を起こした原発のある

### 針が振り切れた

「ピ・ピ・ピ・ピ」放射線測定器の針が完全に振り切れました。バスが大熊町に入った途端の出来事です。窓の外には東京まで続く送電線とその遥か先に東京電力



岡田倫代氏。写真はNHKプロフェッショナル仕事の流儀より

## 中四九プロ定通教育学習交流集会 「助けて！」が自立につながる

演を行いました。岡田氏は元香川県公立高校の英語教諭であり、香川県高教組の組合員でした。進学校勤務から定時制高校の勤務を経て現職。定時制高校に勤務している時にNHKのプロフェッショナル仕事の流儀でも取り上げられたことがあり、現在、公認心理師、臨床心理士、学校心理士スーパーバイザー、香川県警察親子カウンセラー、セリングアドバイザー、丸亀市発達障害児支援協働事業推進委員等を務めています。

各県から参加者の教職員向けに「教師のメンタルヘルス、セルフケアとうつ病チェックからはじまり、適切な子ども理解と子どもへの関わり」について、具体的事例を交えながらの内容でした。ワークショップを含めて、あつという間の2時間で、「子どもを自分のイメージで決めつけていないか。きちんと子どもの話を聴いているか?小さな約束であったりも守れているか」などの、子どもへの関わり方のポイントを整理し

ていきました。「子どもはストレスを感じ不適切な対処行動に至ること。SOSのサインを適切に出せないこと。いかに『助けて!』を言えるかが、自立につながる。」など、データ分析に基づいた説得力のある講演で、定時に勤める教職員だけでなく、全教職員が共有認識すべきことだろうと感じました。

私たち教職員は、部活動、校務分掌、日々の雑務に追われてしま、子どもの置かれて

いる環境が大きく変化しているのに、なかなか教職員がアップデートできず、指導に迷いながらも、旧態依然とした指導を繰り返す職場環境にあります。教職員組合の学習会は、自分の指導を見直し、仲間と共有できる機会を与えてくれます。今度は次の学習会にあな

たが参加してみませんか。2023年度の中四九プロの定通教育学習交流集会は地元長崎で開催されます。

福島第一原発の建物が雨と霧にかすんで見えます。

大熊町はかつての居住地のほとんどが「帰還困難区域」。放射線量が、東京の10倍ほどです。

ところが「経済的理由」により、幹線道路に限り、14年より段階的に通航制限が緩和されました。20年からは二輪車の通行も一部で可能となっています。

車窓から見える風景は、どこにでもあり得る田舎のようです。しかしここで人影を見ることはほとんどありません。

「帰還困難区域」の一部が、放射線量の低減を理由に解除され法的には居住可能となり、駅の周辺などは再開発が行われています。しかしその作業員以外には見かけず、駅から

### 誰もいない町

全な町に戻ったかのよう

放射能がなくなつて安

100mも離れると無

除染土はどこへ